

9. ニューロリハビリテーション研究会

9.1. 第2回身体運動制御学とニューロリハビリテーション研究会

日 時：平成28年7月30日（土曜日）9時30分～16時50分

会 場：畿央大学

1) 招待講演

井澤 淳（筑波大学システム情報系エンパワーメント情報学プログラム）

「計算論からアプローチする運動学習・運動障害・機能回復」

今水 寛（東京大学大学院人文社会系研究科心理学研究室）

「認知・運動学習と脳のネットワーク」

2) ケースディスカッション

植田 耕造（星ヶ丘医療センターリハビリテーション科）

「脳幹損傷後の姿勢制御・歩行障害に対するニューロリハビリテーション」

3) 指定演題発表

菊地 豊（脳血管研究所美原記念病院神経難病リハビリテーション科）

「脊髄小脳変性症の長期歩行解析に基づいた介入の試み」

4) ポスター発表 16演題

2016年7月30日に畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター主催の『第2回身体運動制御学とニューロリハビリテーション研究会』が開催された。

招待講演として、井澤淳先生（筑波大学）、今水寛先生（東京大学大学院）、前田貴記先生（慶應義塾大学）、吉田正俊先生（生理学研究所）にご登壇頂いた。



井澤先生からは、「計算論からアプローチする運動学習・運動障害・機能回復」と題して、運動学習の計算理論、計算論的にみた様々な疾患における運動障害のメカニズムと機能回復の可能性について、お話頂いた。特に運動学習における2つのコンポーネントである内部モデル（順モデル）と再最適化の講義は、臨床で認められる患者さんの運動障害の様態と非常にマッチしており、参加された臨床セラピストの視点が広がった。

今水先生からは、「認知・運動学習と脳のネットワーク」と題して、内部モデルが小脳で形成されること、運動学習における fast dynamics を担う前頭-頭頂ネットワーク、slow dynamics を担う小脳、そして運動学習前の resting state から個人の運動学習能力を予測できることまで、非常に美しい研究成果の数々をご紹介頂いた。

ケースディスカッションや指定演題では、植田耕造先生（星ヶ丘医療センター）、菊地豊先生（脳血管研究所美原記念病院）にご登壇頂き、Lateropulsion を呈する症例、脊髄小脳変性症のケーススタディおよび臨床研究をご紹介して頂いた。どちらの先生も充実したサーベイから得られた豊富な知識に基づく仮説・検証作業を臨床実践されていた。

9. 2. 第 1 回高次脳機能学とニューロリハビリテーション研究会

日 時：平成 28 年 7 月 31 日（日曜日）9 時 30 分～16 時 50 分

会 場：畿央大学

1) 招待講演

前田 貴記（慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室）
「自己意識の神経心理学」

吉田 正俊（生理学研究所認知行動発達研究部門）
「マカクザルを用いた半側空間無視動物モデル」

2) ケースディスカッション

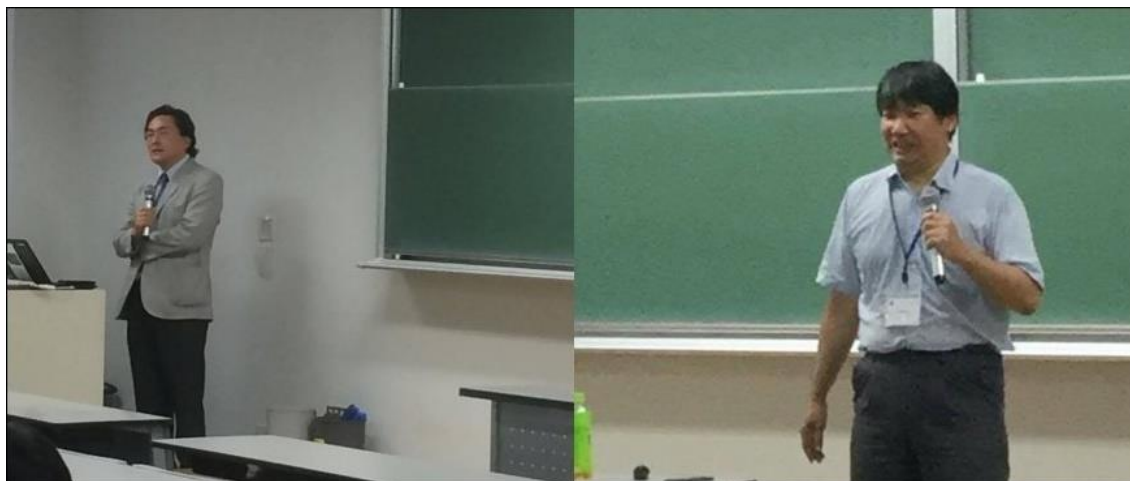
生野 公貴（西大和リハビリテーション病院リハビリテーション科）
「半側空間無視症状改善のためのニューロモデュレーションアプローチ
— 腹側注意ネットワーク惹起を企図した視覚刺激と経頭蓋直流刺激の併用介入 —」

3) 指定演題発表

高村 優作（村田病院リハビリテーション科）
「無視空間への意図的な視線偏向 — 半側空間無視の回復過程における代償戦略 —」

3) ポスター発表 25 演題

2016年7月31日（日）に、第1回高次脳機能学とニューロリハビリテーション研究会を開催した。



今回は、前田貴記先生（慶應義塾大学）、吉田正俊先生（生理学研究所）をお招きし、ご講演して頂いた。

前田先生からは、「自己意識の神経心理学」と題して、身体所有感や運動主体感に関することを神経心理学的にご説明して頂いた。また、運動主体感の定量的評価である「Keio Method」についても詳しくご解説して頂いた。また質問時間では非常に活発な意見交換が行われ、非常に良い雰囲気だった。

吉田先生からは、「マカクザルを用いた半側空間無視動物モデル」と題して、半側空間無視に関連する病巣について分かりやすくご説明して頂いた後に、自身のマカクザルでの半側空間無視研究をご紹介と脳のネットワークとして捉える重要性について解説して頂いた。

ケースディスカッションや指定演題では、生野公貴先生（西大和リハビリテーション病院リハビリテーション科）、高村優作先生（村田病院リハビリテーション科）にご登壇頂き、半側空間無視のケーススタディおよび臨床研究をご紹介して頂いた。研究者と臨床家が同じ場所でディスカッションするという形式で、非常に実りのある研究会となった。

9.3. 第1回 発達神経科学とニューロリハビリテーション研究会

日 時：平成28年12月3日（土曜日）9時30分～16時50分

会 場：畿央大学

1) 招待講演

乾 敏郎（追手門学院大学心理学部心理学科）

「コミュニケーション機能の脳内メカニズムと自閉症発症機構」

中井 昭夫（兵庫県立リハビリテーション中央病院子どもの睡眠と発達医療センター）

「神経発達障害は身体障害である？～診察室から見てきた子どもの発達における身体性の重要性～」

2) ケースディスカッション

福澤 友輝（日本バプテスト病院リハビリテーション科）

「脳性麻痺児の下肢に対する身体性に注目した早期治療介入」

3) 指定演題発表

信迫 悟志（畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター）

「子どもにおける運動の不器用さと内部モデルとの関係性」

3) ポスター発表 10 演題

2016年12月3日（土）に、第1回 発達神経科学とニューロリハビリテーション研究会を開催した。



今回は、乾敏郎先生（追手門学院大学）、中井昭夫先生（兵庫県立リハビリテーション中央病院）をお招きし、講演して頂いた。

乾先生からは、「コミュニケーション機能の脳内メカニズムと自閉症発症機構」と題して、言語・非言語コミュニケーション機能の主要な脳内基盤に関する研究を紹介して頂くとともに、自閉症発症機構のモデルについても紹介して頂いた。厳密な研究手法によってモデルを生成していく過程は、まさに今後の自閉症研究に有益なものとなった。

中井先生からは、「神経発達障害は身体障害である？～診察室から見えてきた子どもの発達における身体性の重要性～」と題して、協調運動、睡眠、食事など診察室から見えてきた子どもの発達における身体性の重要性について、臨床研究のご紹介や取り組みを交えながら概説して頂いた。臨床現場での困難さなども提示して頂き、大変意義のある講演であった。

ケースディスカッションや指定演題では、福澤友輝先生（日本バプテスト病院リハビリテーション科）、信迫悟志先生（畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター）にご登壇頂き、脳性麻痺児のリハビリ経過や発達性協調運動障害に関する臨床研究をご紹介して頂いた。混沌とする臨床での現象を的確に評価・介入するプロセスは、まさに発達障害の臨床および研究のお手本となるような発表だった。